



フクロ・バイ・ニー

藤原万璃子 著

羽田共見 イラスト

スタンド・バイ・ミー

《立読み版》

藤原 万璃子

イラスト 羽田 共見

男を好きになるなんて、考えたこともなかった。

この世に生を受けて三十八年。初恋はもちろん、思春期の恋愛も大人になってからのそれも、対象はすべて女性だった。大恋愛の末に学生結婚して、妻は早くになくしたけれど、ひとり息子は健やかに育ってくれて、父ひとり子ひとりの生活にもなんの問題もなく——同性に恋したことはおろか、ときめいたことすらただの一度もありはしない。

「……怖い？」

不意に、うす闇の中からそんな声があった。

どきん、と胸の内側で心臓が跳ね上がる。それでも彼は、顔を上げることもふり返ることもできずに、ただ呆然と立ちつくすばかりだった。

「やっぱり……やめておくか？」

もう一度、そんな声があった。やめる？　今さら？　それは、いくらなんでも往生際が悪すぎる——いや、そういうことじゃなくて。

「今のままの方が……友人のままの方がいいというなら、それはしかたない。あんたはゲイじゃないし、遊びでこういうことができる人でもないし……そもそも、男とこんなふうになること自体、初めてなん

だろう？」

静かに、論すように声の主は続けた。思わず彼は顔を上げ、背後をふり返る。

「……無理はしないでくれ。無理強いしてあんたに嫌われるくらいなら、今のままでいい。飲みに行ったり、遊びに行ったり、他愛のないことを話して笑いあったり……相談にももちろん乗るし、愚痴も聞く。下心は永遠に封印して、これからもあんたの力になるよ。だから……」

グレーがかった碧い瞳が、彼を見つめて優しく光った。どうして、こんなに……優しい目をするんだろう。初めて会った時からそうだった。困っているところを助けてくれて、相談に乗ってくれて、何れとなく気遣ってくれて……でも、よくしてくれたから今ここにいるわけじゃない。

最初は確かに友情だった。でも、いつの頃からか……それだけではなくなった。もうずいぶんと長いこと、そんなふうになんか人を愛したことがなかったもので、気づくまでに時間がかかってしまったけれど……今なら言える。この感情は、単なる友情じゃない。それ以上のものだ。

「……無理なんかしてない」

自分で聞いても、その声はかすれてふるえていた。ちゃんと聞こえただろうか。やっぱり怖がっていると思われやしなかっただろうか。

「無理なんかしてない、ちっとも……そりゃあ……確かにきみの言う通りだけど……同性とこんなふうになるなんて初めてだから、困ってるし迷ってるしためらってもいる……でも……」

そこまで言って、彼はこくと喉を鳴らした。情けないことを言っているのはわかっている。でも、今さら強がってもしょうがない。だって、もう若くないし……バツイチだし、子どももいるし、もともとその気があったわけでも性的志向が変わったわけでもないし、同性との恋愛を始めるのはものすごく勇気のいることなのだ。

「……友だちじゃだめなんだ」

ふるえるように吐息してから、きつぱりと彼は言った。

「だって……友だちのままじゃ、きみはいつか他に恋人を作るだろう？」

グリーングレイの瞳が、怪訝そうに細められた。

「それは……いやなんだ……きみに、そういう人ができるのは……きみが、僕以外の誰かをそんなふうに見つめるのは……いやなんだ、僕だけじゃないと……僕だけのものじゃないと……!!」

うめくように、絞り出すようにそう言った次の瞬間——彼は、いきなり抱きすくめられた。

「……もうとうに、俺はあんたのものだよ」

力強い腕が、分厚い胸が、温かなぬくもりが彼を包みこむ。胸の奥がきゅうつとしめつけられて、目頭がじんと熱くなる。

「愛してる。愛してるよ、シン……あんたがもういやだと言うまで、俺はあんたのそばにいる。あんたを愛して、あんたを包んで……あんたと一緒に生きていく」

その言葉で、胸の奥にあった小さなカプセルがぱちんとはじけて、熱いものが広がっていく。忘れていた。この感覚。大切なものを見つけた時の、愛しい人と出会った時の、涙ぐむようなこの幸福感。

ふるえるように、彼は嘆息した。息子さえいけば、生きていけると思っていた。今この瞬間も、この世の誰より息子が大切なのには少しの変わりもない。でも……息子は、パートナーとは違うのだ。いつの日か彼も、自分のもとから巣立っていってしまうのだろう。誰よりも大切な、たったひとりの伴侶を見つけて。

「うん……うん。そばにいてくれ。もういやだなんて言うわけない、こんな気持ち……初めてなんだ……」

亡き妻にだって、こんなふうに思ったことはない。彼の一拳手一投足が気になって、顔を見られないだけでなんとなくしよんぼりして、会えれば会えたで嬉しいのにどうしようもなく心が騒いで、まるで

思春期の少女のように居ても立ってもいられなくなる。

忘れていた。これが恋なんだ。これが、人を恋するということなんだ。若くして家庭を持って、父親にもなったのに妻に去られ、幼い息子を抱えて無我夢中で生きてきて……もう、恋をすることなどないと思っていた。恋なんかしなくても生きていけると思っていた。それなのに――

「……きみが好きだ」

顔を上げて、うす闇の中で半貴石のように光る瞳をまっすぐに見つめながら、語尾まではっきりと彼は言った。

「男だとか、年上だとか……そんなことはもうどうでもいい。きみが好きだ。きみを愛してる。きみに会えて……本当によかった」

こんな日が来るなんて。六つも年下の同性と、見つめあって、抱きあって、好きだと言われて――自分からも、同じ言葉を返すなんて。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

スタンド・バイ・ミー

《立読み版》

発行日 2011年11月18日

著者名 藤原 万璃子

イラスト 羽田 共見

発行所 【MILK-CROWN】
ミルククラウン

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Mariko Fujiwara 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。